

## 児童のコミュニケーション能力を育む授業の研究

### —特別活動と外国語活動の横断的学習を通して—

峰 希美(長崎大学大学院教育学研究科)

水口之斉(長崎大学大学院教育学研究科)

寺嶋浩介(長崎大学大学院教育学研究科)

#### 1. 研究の背景

児童が自分の感情や思いを表現したり,相手の思いを受け止めたりすることができず,他者とコミュニケーションが図れないとの課題があり,コミュニケーションに関わる教育を行う必要がある。このことは中央教育審議会(2008)やコミュニケーション教育推進会議(2011)においても指摘されている。

児童のコミュニケーション能力を育むために様々な教科や領域において言語活動や体験活動の充実が図られている。外国語活動においては「外国語を用いて,積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」に重点を置いている。児童は友達と英語で関わることの楽しさを感じている(新潟県教育委員会,2011)一方で,「英語を使ってコミュニケーションをすることへの積極性」が身についたとの意識は低い(ベネッセ,2011)。そこで外国語活動に主軸を置いた授業を計画・実践することにより,児童同士が自然とコミュニケーションを繰り返す中でコミュニケーション能力を育む授業を目指す。

本研究では,コミュニケーションを「相互にメッセージを伝え合うことによって,考えを明確にし,自己を表現し,他者を理解し,互いの存在について理解を深め,尊重していくこと」と定義し,コミュニケーション能力を「コミュニケーションを取り合うために,人間関係を形成していく力」と捉える。

#### 2. コミュニケーション能力を育む手立て

学校教育においてコミュニケーション能力を育むために,「他者との協調や協働の場の設定」と,「単一の教科や授業等で設定するのではなく,各教科の特質を踏まえ,意図的・計画的に設定すること」が重要である(コミュニケーション教育推進会議,2011)。この提言から「横断的学習」と「協同学習」を導いた。二つの手立てについて詳しく述べる。

横断的学習とは「各教科や領域の垣根を低くしてあるテーマに基づいて,それぞれ実施している学習内容や活動をまとめて実施すること(高階,1996)」である。この学習の意義は,「①教科等を横断し,教科を超えた学習内容を設定できること,②現代社会の課題と子どもが向き合い,自己の生き方を探求する学習場面を設定で

きること,③体験から実践に至る学びの過程を体験できること,④各教科等で関連の深い内容を相互に関連付け,統合を図ることができること(静岡県教育センター,1999)」である。コミュニケーション能力の育成は,現代的課題の一つであり,様々な教科・領域の内容と関連が見られ,体験と実践により学びが得られるため,横断的学習は能力育成に効果が高いと考える。

特に外国語活動を主軸にしたコミュニケーション教育を行うにあたり特別活動との横断的学習を取り入れる。「外国語活動との関連について,両者の特質を生かして,友達とのかかわりを大切にした体験的なコミュニケーション活動を一層効果的に展開できるようにする(小学校学習指導要領解説特別活動編,2008)」とあり,コミュニケーションに関わる教育として外国語活動と関連が深いからである。

協同学習とは「協力して学び合うことで学ぶ内容の理解・習得を目指すとともに,協同の意義に気づき,協同の技能を磨き,協同の価値を学ぶことが意図される教育活動(関田ら,2005)」である。協同学習の効果として,「仲間との話し合いの機会を通してコミュニケーション能力が伸び,対人的な感受性を学ぶことができる(杉江,2011)」ことがある。学び合いの中で学習を行う協同学習は,コミュニケーションを行いながら学習活動を進めるため,能力育成の効果が高いと考える。

### 3. 研究の目的

コミュニケーション能力を育むために,協同学習を取り入れた特別活動と外国語活動の横断的学習を展開し,行動指標等による検証を通して手立ての有効性を明らかにする。

## 4. コミュニケーション能力を育む授業

### (1) 先行実践の分析

外国語活動と横断的学習と協同学習の先行実践からコミュニケーション能力を育む授業の実現のために以下の3つが有効であることが明らかになった。

- ①外国語活動においてペアやグループ活動などの児童同士のコミュニケーションの場を設けること(深水,2009)(森,2009)
- ②特別活動でスキルを学び,外国語活動で活用する単元を設定すること(星野ら,2008)(山元,2008)
- ③協同学習におけるコミュニケーションの必然性のある課題を設定すること(山本,2011)(芳賀,2010)

### (2) 授業設計

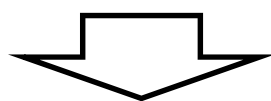
(1)で述べた先行実践と筆者が行った実践から得られた知見をもとに,コミュニケーション能力を育む授業を設計した。特別活動で「話す」「聞く」「反応する」などのコミュニケーションのスキルを教え,外国語活動でスキル活用を持つ横断的学習を行う。特別活動では,フィードバックの時間を充分に取ることで学ん

だスキルの活用へ意欲を高める。そのスキルを外国語活動の導入で振り返り、活動内で繰り返し確認することで意識づける。外国語活動においては、「コミュニケーション活動」「タスクを志向した活動」「まとめ」においてコミュニケーションの場を設定する。

協同学習の視点から述べる。特別活動ではグループから、学級全体へ協同の広がり仕組み、外国語活動ではペアからグループそして全体へという協同の広がり仕組み。特に協同を意図し、特別活動でリハーサル、外国語活動でタスクを志向した活動を設定し、コミュニケーションの必然性のある課題を設定する。この際、活動が発展的学びになるように配慮する。

以上の留意点に基づき、授業設計を行った。図1はコミュニケーション能力を育む授業の流れである。

	活動 (時間)	ねらい	活動の具体	指導上の留意点	形態
特別活動・スキルを学ぶ	インストラクション (2分)	単元と授業両方の見通しをもつ。	①単元全体で学ぶことを知る。 ②授業のめあてを設定する。	○単元と授業の見通しをもてるような声掛けを行う。	全体
	モデリング (10分)	コミュニケーションのスキルのモデルを観察する。	③やり取りの見本を見る。 ④見本からの気づきを発表する。 ⑤スキルのポイントを知る。	○身に付けさせるポイントの明確な見本を示す。	全体
	リハーサル (18分)	適切なスキルを繰り返し反復させることで、スキルの定着を図る。	⑥リハーサル活動の流れを知る。 ⑦スキルの練習を行う。	○適切なスキルを身に付けさせるため、活動と活動の間にポイントを振り返る。	グループ
	フィードバック (15分)	自分自身について振り返るとともに、今後の行動に向け意欲を持つ。	⑧ワークシートを記入する。 ⑨開き合いを行う。 ⑩教師からのまとめを行う。	○今までの行動について考え、今後に向けた意欲を持たせるために、振り返りに十分な時間を持つ。	個人 ↓ 全体



	活動 (時間)	ねらい	活動の具体	指導上の留意点	形態
外国語活動・スキルを活用する	導入 (10分)	活動に対する心構えと見通しをもたせる。	① あいさつをす る。 ② 歌を歌う。 ③ 前時の学びを 振り返る。 ④ めあてを知る。	○ 前時とのつながりを児童に意識させるため、動作を交え、間を置きながらポイントを振り返る。	全体
	単語や表現に慣れる活動 (5分)	活動で用いる単語や表現に慣れ親しむ。	⑤ 用いる単語や表現の発音を知る。		全体
	コミュニケーション活動 (5分)	習った単語や表現を使って、ペアでコミュニケーションを行う。	⑥ ⑤で習った表現を使い、ペアで活動を行う。	○ 見本を示す際は、会話とコミュニケーションの両方を満たす見本を示す。	ペア
	タスクを志向した活動 (15分)	スキルを活用しながら協同し、タスクを達成する。	⑦ タスクを知る。 ⑧ タスクの達成に向けてグループ活動を行う。	○ 「話す・聞く」活動を邪魔する要因をつくらない。 ○ スキルを活用させるために、前時の学びを想起させる。	グループ
	まとめ (10分)	協同的に学ぶことの良さを体験的に理解し、単元の学びを振り返る。	⑨ お互いの取り組みをペアで評価する。 ⑩ 単元を振り返る。	○ 協同で取り組むことの良さに体験的に気付かせる。 ○ 単元全体のまとめを意図した振り返りを行う。	ペア ↓ 全体

図 1 コミュニケーション能力を育む授業の流れ

## 5. コミュニケーション能力を育む授業の実践

授業設計に基づき、長崎市内の小学校で特別活動1時間と外国語活動1時間の計2時間の授業実践を行った。以下に授業の展開と指導上の留意点を示す。

### (1) 特別活動

特別活動の展開について表1で示す。

表 1 特別活動展開案

活動(時)	活動の具体	形態
インストラクション(2分)	①単元の内容とめあてを知る。	全体
モデリング(10分)	②教師の見本を見る。 ③良い聴き方のポイントを学ぶ。	全体
リハーサル(18分)	④3人組で、聴く人、話す人、見る人に分かれて良い聴き方の練習を行う。	グループ
フィードバック(15分)	⑤ワークシートを記入後、開き合いを行う。 ⑥教師からのまとめを聞く。	全体

留意点としては、まず、モデリングにおいて授業者と担任教師によりスキルの明確な見本を示し、その後の活動において何度もポイントを繰り返すことにより、「上手な聴き方と反応の仕方」を定着させる。次に、リハーサルで協同を意図したグループ学習を行う。話す内容について事前に原稿を書かせ、練習する時間を取り、児童が「聴き方」の学びに集中できるように配慮する。活動と活動の間に、良い聴き方のポイントについて再度確認し、ポイントに沿ってフィードバックをしている観察者のコメントを全体で共有し、活動が回を重ねるごとに高まることをねらう。フィードバックにおいては、自身の今までとこれからの聴き方について考え、活用の意欲を高めるために十分な時間を配分する。

## (2)外国語活動

外国語活動の展開について表 2 で示す。

表 2 外国語活動展開案

活動(時)	活動の具体	形態
導入(10分)	①ウォーミングアップをし、良い聴き方のポイントとめあてを確認する。	全体
単語や表現に慣れる活動(5分)	②用いる単語や表現に慣れ親しむ。	全体
コミュニケーション活動(5分)	③行きたい国をペアで伝え合う。	ペア
タスクを志向した活動(15分)	④班で調べた国について発表する準備をする。	グループ
まとめ(10分)	⑤ペアで伝え合い活動を行う。 ⑥振り返りシートを記入する。	全体

特別活動で学んだ「上手な聴き方と反応の仕方」の活用の方として、英語をツールとしながらコミュニケーションを取り合うことをねらい、授業を構成する。まず、導入において、板書での提示と動作を交えポイントを確認し、児童に意識づける。コミュニケーション活動においては、活動の見本を示す際にコミュニケーションの見本を示すために、あいさつや笑顔を交えたやり取りを行う。タスクを志向した活動はグループでの協同を意図し、「班で調べた国について紹介するための準備をする」というタスクを設定する。「話す・聞く」活動を阻害しないよう、互いに聴き合うことを意識させる声掛けを行う。まとめにおいては、ペアで互いの取り組みの良かったところを伝え合い、協同の良さを体験的に理解させる振り返りを行う。

## 6. 実践の評価方法

横断的学習と協同学習がコミュニケーション能力を育むために有効であったか、単元全体を通してコミュニケーション能力を育む授業を行えたか、検証を行う。検証に用いる結果を以下に示す。

### (1) 振り返りシートの項目

表 3,4 の目標行動の具体の行動に合わせて項目を作成し、「◎よくできた ○できた △できなかった」の3段階で尋ね、◎を3点、○を2点、△を1点と計算し全児童の回答の平均値を出した。表 3,4 の目標行動と具体の行動は、廣岡ら(2007)の指標を基に、第2著者と第3著者と協議し設定した。

目標行動①「相手の話を注意深く聞くことができる。」

表 3 目標行動①の具体の行動

行動番号	具体の行動
1-1	相手の顔を見ながら話を聞くことができる。
1-2	相手の話を最後まで聞くことができる。
1-3	相手の話をうなずく、相槌などの動きを加えて聞くことができる。

目標行動②「積極的に自分の思いを伝えようとする。」

表 4 目標行動②の具体の行動

行動番号	具体の行動
2-1	相手の顔を見て話すことができる。
2-2	相手に伝わる声の大きさを話すことができる。
2-3	伝えたいことを最後まで話すことができる。
2-4	相手の言葉や行動に対して内容に応じた言葉を返すことができる。

## (2)グループ活動での児童の発話と行動

タスクを志向した活動における児童のコミュニケーションの様子を把握するため1グループを抽出し、ビデオ分析を行った。次頁に示す表7,8はコミュニケーション行動が表われた2つの場面の児童の発話と行動である。活動内で目標行動が表われたかを把握するために、表3,4に示した具体の行動が表われた箇所は行動番号を記録した。

## 7. 結果

### (1)振り返りシートの項目

表5に特別活動の振り返りシートの項目別結果を示す。

表5 特別活動振り返りシートの項目別結果

質問項目	平均値
1 相手の顔を見ながら,話を聞くことができましたか。	2.80
2 相手の話を最後までしっかりと聞くことができましたか。	2.80
3 相手の話をうなずく,あいづちなどの動きを加えて聞くことができましたか。	2.93
4 相手に伝わる声の大きさと話すことができましたか。	2.43
5 はっきりと最後まで言葉を話すことができましたか。	2.57
6 相手の顔を見て話すことができましたか。	2.70
7 相手の言葉や行動に対して,言葉の反応をすることができましたか。	2.47

表6に外国語活動の振り返りシートの項目別結果を示す。

表6 外国語活動振り返りシートの項目別結果

質問項目	平均値
1 友だちの顔を見ながら,話を聞くことができましたか。	2.70
2 友だちの話を最後までしっかりと聞くことができましたか。	2.97
3 友だちの話をあいづちなどの動きを加えて聞くことができましたか。	2.40
4 友だちに伝わる声の大きさと話すことができましたか。	2.70
5 はっきりと最後まで言葉を話すことができましたか。	2.80
6 友だちの顔を見て話すことができましたか。	2.53
7 友だちの言葉や行動に対して言葉の反応をすることができましたか。	2.53

(2)グループ活動における児童の発話と行動

場面 1

表 7 場面 1 における児童の発話と行動

主体	発話・行動内容	行動番号
C3	(4の腕を鉛筆でつつき)「we want to go to eat?」 (1,4が3に注目している。遅れて2も見る)	[1-1,1-2,1-3]
C4	「eat」	[2-4]
C3	(4の目を見ながら)「eat?」	[2-1,2-2,2-3]
C4	(うなずきながら)「eat」	[1-1,1-2,1-3]
C3	「eat?」(ワークシートに聞き取った言葉を書く)	

グループ活動が始まって8分ごろのやりとりである。C3がC4に発音を尋ねたことからコミュニケーションが生まれた。C4はC3の顔を見ながら、最後までC3の話に対して相槌を入れながら聞いた。全て聞いた後で、C3が一番つまずいていた「eat」の発音を相手の顔を見てゆっくりと伝えていた。C3はその発音を受けて、C4を見て繰り返すように「eat」と言った。それに対して、同意するようにC4が「eat」と繰り返し、C3がその聞きとった言葉を忘れないうちにつぶやきながらワークシートに書き取った。そのやり取りをC1とC2は見守っていた。

場面 2

表 8 場面 2 における児童の発話と行動

主体	発話・行動内容	行動番号
C3	「アンドいらんやろ?あ,分かったはい(挙手) 言うよ。 We want to eat Egypt rice, fhoool. あー,Egypt rice and fhoool.(4を見ながら)	[2-1,2-2,2-3]
C4	(3が話している間,うなずきながら話を聞いている)	[1-2,1-3]
C3	「最後のアンドっている?」	[2-1,2-2,2-3]
C4	(話を聞き,ジェスチャーをしながら,)「最後の1個の前に アンド!」	[1-1,1-2,1-3]
C3	「まじ?」	[2-4]
C4	(ジェスチャーをしながら)「なんとか,なんとか,アンドな んとか。」	[2-1,2-2,2-3]
C3	「(うなずく)え,え,うん??(4を見ながら)ここはエジプ トライス?これは,エジプトライスよね?」	[2-1,2-2,2-3]



C4	「うん」	[1-1,1-2,1-3]
----	------	---------------

グループ活動が始まって、9分ごろのやりとりである。C3がC4の方を見ながら自分の担当部分を練習している場面である。C3が自分の文章を読み、C4は口をはさまず、うなずきながら聞いた。C3は練習した後、疑問を發した。その際、相手の顔を見て伝わる声の大きさを、最後の語尾までしっかりと伝えた。C4はその疑問をC3の顔を見ながら最後まで聞き、疑問に対してジェスチャーを交え、説明している。その後、C3がその返答についてさらに質問を投げかけた。C4は相手の方を見て、最後まで話を聞き、C3が確認した内容についてあいづちを返した。

## 8. 考察

### (1)横断的学習

表 5,6 の質問項目から特別活動でポイントとして示した聴き方の 4 つの項目で中央値を上回った。表 7,8 の児童の發話と行動において特別活動で学んだスキル [1-1,1-2,1-3,2-4] を活用している会話と行動がみられた。そこから横断的学習としてつながりのある授業設計が、児童のコミュニケーション能力を育むために有効であることが分かった。

### (2)協同学習

児童の發話と行動の場面 1(表 7)では、C3の疑問に対して C4はうなずき、あいづちを加えながら、返答している。その様子を C1,C2 は見守り、C3 の学びの様子をグループで把握しようとする行動がみられる。場面 2(表 8)では、C3 の疑問のつぶやきに対して、C4 が相手の方を見ながらジェスチャーを交えて返答を行っている。これらは、協同学習内で自然と起ったコミュニケーション行動である。「相手の方を見て尋ねる」「相手に分かるようジェスチャーを加える・ゆっくりとした速度で話す」、「繰り返して伝える」などの行動を自然なやり取りとして活動の中で行えたことから、コミュニケーション能力を育むために有効であったと言える。

### (3)総合考察

コミュニケーション能力を育む手立てとして横断的学習と協同学習を取り入れた授業実践を行った。表 5,6 から振り返りシートの項目はすべて中央値を上回っており、授業でポイントとして示した聴き方の 4 つの項目の数値が高かった。表 7,8 から特別活動で学んだ「良い聴き方のポイントを使って聞く→質問や感想を伝える(反応)」プロセスが外国語活動において見られた。つまり、メッセージを伝え合い、自分を表現し相手を理解しようとして関わっていたということである。そのことよりコミュニケーション能力を育む教育としてこの単元の学びは有効であったと言える。

外国語活動の授業としてこの実践を考察する。表 7,8 の児童の様子から、英語と

日本語そして動作でのやり取りを交えながらお互いの思いを表現し合う姿が見られる。そのため、外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことができたと言える。

## 9. まとめ

協同学習を取り入れた特別活動と外国語活動の横断的学習は、児童のコミュニケーション能力を育むために有効であった。横断的学習と協同学習を工夫することによりコミュニケーション能力を育むという外国語活動の新しい授業の形を提案することができた。

### (引用・参考文献)

- ・コミュニケーション教育推進会議(2012)子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～
- ・言語力育成協力者会議(2007)言語力の育成方策について(報告書案)
- ・廣岡秀一ら(2007)小学生のコミュニケーション能力に対する Performance Assessment(2):活動プログラム(task)と評価基準(Rubric)の開発,三重大学教育学部研究紀要,58,p.203-214
- ・星野貞邦ら(2008)さいたま市「人間関係プログラム」に見るスキル習得のポイントと展望—児童・生徒のコミュニケーションの場を育む—,ベネッセ教育総合研究所,BERD,No.11,p.17-22
- ・文部科学省中央教育審議会 (2008) 幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)
- ・森まゆみ(2009)高学年の児童の知的好奇心に応える外国語活動の在り方—児童の発達段階を考慮したプロジェクト型外国語活動の開発と工夫—
- ・新潟県立教育センター(2010)外国語活動アンケート調査(報告)
- ・関田一彦ら(2005)協同学習の定義と関連用語の整理 1,日本協同教育学会
- ・杉江修治(2011)協同学習入門—基本の理解と 51 の工夫—,ナカニシヤ出版
- ・山元悦子(2008)国語科教育の視点から見たコミュニケーション教育—共創的コミュニケーション能力の育成を目指して—,ベネッセ教育総合研究所,BERD,No.11,p.12-16
- ・山本良(2012)コミュニケーション力を育成する授業・学校—協同学習の実践から考察する—学級活動と中学校理科における実践,山形大学大学院教育実践研究科年報,p210-217
- ・芳賀 貴明(2011)文法事項の確実な定着により,コミュニケーション能力を育成するための英語指導の工夫,平成 22 年度東京都教員研究生カリキュラム開発研究報告